
墮落～墮天使もキレル～

マライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墮落〜墮天使もキレル〜

【Nコード】

N6990K

【作者名】

マライ

【あらすじ】

天国でのほほんと暮らしてきたルシファー。
そこにゼウスからの頼み事。
色々あって、天国で全面戦争起こります。

初戦（前書き）

全四部で構成されちゃうかも。
もしかしたら五部かも。
ついでに、それ以上になるかも。

初戦

———天使———

それは天の使い。

背中に純白の翼を持ち、神に使える者。
死者を天国に導く者。

そして———

時として、神に抗う者。

めっちゃ昔の天国。

「あー疲れた。」

神の住む宮殿の中庭のベンチで一人くつろぐ天使が一人。
彼の名前は『ルシファー』。

年齢不明、性別男。容姿十代。

性格・ずる賢い。勝気。

そんな彼は天使歴60年弱。
まだ半人前の代だが、戦闘のセンスはずば抜けている。

天使始めて30年くらいの時に、決闘で15人の屈強な天使相手に無傷で勝利したという武勇伝がある。

そんな話もあってか、天国での知名度はまあまあ。

三人に聞けば一人は「話を聞いた事はある」というレベル。

「天国は平和でいいけど、暇だなく。なんか起こないかな〜。」
現在仕事サボり中。

こいつの仕事は地上で彷徨っている魂（要するに幽霊）を天国に誘導する事。

天国よりかは狭いものの、地球だって簡単に全部見れるほど小さくは無い。

だからこそこの仕事があるわけで。

いちいち探すのが面倒なので、ここで休んでいるのだ。

（やべ・・・眠りそう・・・）

なんでわざわざ神の住む宮殿に居るのかというと、灯台下暗しを参考にしてている。

流石に宮殿内で堂々とサボってるわけ無いよな、と、裏をかいた訳。

「お昼寝ですか？ルシファー。」

「ふぁっ!？」

不意に声をかけられた。

あわてて周囲を見ると、ベンチの横に一人の女性が立っていた。

「マ、マリアさん・・・。」

マリアといわれた女性は、ニッコリと微笑んだ。

「だめじゃないですか。仕事サボってちゃ。」

「ごめんなさい・・・。」

この人は、神の一人、女神のマリアだ。
神、神、って言っても、一人じゃない。

天国には天使より少ないけど、結構な数の神様が居る。
ゼウスをはじめ、アフロディテやガイア、オーディンなんてのもいる。

「早く行ってきなさい。この事はゼウス様には黙っておいてあげるから。」

「はあ、どうも。それじゃ。」

そう言うところシファアは、背中の羽を羽ばたかせて飛んでいった。

「あーあ。めんどくさー。でも、マリアさんがわざわざ黙っててくれるんだし・・・。」

数多くいる神の中でも、めっさ恐ろしいのとかさっきのマリアみたいに優しいのもいる。

その中でもゼウスは、神々の王、とだけあってめっちゃめっちゃおっかない。

ちょっと前に、マッサージと称して関節技かけたら一週間磔にされた。

その時の形相ったらもう魔神だよ、魔神。

自力で脱出できなかったら多分今でも磔のまんまだよ。

「帰ったら誰かと飯食いに行こーっと。」

「なんだあ、途中でいらないと思ったら宮殿にいたんだ。」

「まあな。でも、マリアさんにみしかった。」

同世代の天使達と呑気に食事をするルシファア。

今日のメニューは、普通のパンと普通の赤ワイン。

一般の天使の食事なんてこんなもん。

位がもう三つくらい上がると少し豪華になる、という噂が結構ある。

「おい、ルシファーいるか？」

食堂に、一人の声が響いた。

「あーい。俺だよー。」

片手を上げて知らせる。

「ゼウス様が呼んでたよ。また碟にでもされるんじゃないか？」

「縁起でもない事言うな。じゃ、お先。」

一緒に食事していた天使仲間に挨拶をして、ゼウスの下に向かった。

「ここでいいのか・・・。」

指定された場所は、特に何もなく、青々とした草が広がる草原だった。

強いて言うと、夜だから静かですごく怖い。

「何してんだよあいつ（↑ゼウス）早く来いよ・・・。」

静けさに本気でビビっていると、

「グルルル・・・。」

背後から、うなり声が聞こえた。

「何々!？」

振り返ると、そこには全長3mほどの巨大な黒毛の犬がこちらを向いて牙をむき出しにしていた。

「あゝん？ んだコラ犬。ホットドッグにされなくなかったら今す

ぐ失せ・・・」

悪態をついていると、後ろからもう一匹。
今度は白い毛の同じ大きさの犬が現れた。

「・・・やば。」

二匹は、予想通りいっぺんに襲い掛かってきた。
後ろに身を引き、両腕に自らの武器を出す。

「ったく・・・どこのオル○ロンだよ。狩っちゃうぞ、銃で。」
両手に持つ白い銃を犬の眉間を狙って撃つ。

が、敵さんも中々やる。銃弾かわされたよ。どんだけ。
一方を狙っていると、もう一方が背後から襲ってきた。
流石に避けきれず、右肩に爪が掠る。

「痛った・・・。もう怒った。お前ら消し飛べ。」

前後にいる犬が、同時に噛み付こうと飛び掛る。
ルシファーは軽く浮き上がり、体を埋め、羽で包み込む。

二匹の犬が、ルシファーの射程圏内に入り込んだ。

その瞬間、ルシファーの翼が輝き、翼と両手足を大きく広げ、衝撃
波を放つ。

二匹の犬は、同時に吹っ飛んで動かなくなった。

「ハハッ、名づけて『天使の咆哮』だ!!」

勝利したルシファーは犬の顔面をベチベチ叩いて大喜びする。

「流石だなあ。ルシファー。」

「げ・・・この声・・・。」

後ろから聞こえる低い声。
忘れもしない。

追っかけられてる時に嫌というほど聞いた。

恐る恐る振り返った先には、やっぱり、例の人がいた。

「ゼウスさん……。」

「なんだそんな顔して。磔がそんなに怖かったか。」

「いや、そんなんじゃない。」

「まあ、あれは悪かったと思っているが……四の字固めかけるお前も……な？」

足をさすりながら微笑するゼウス。

見た目は50歳くらい。がっちりした体系に神とは思えぬツンツン頭。

かなりトラウマの人物が目の前にいる。

「天界獣を二匹いっぺんに倒せるお前なら、頼んでもいいだろう。」

「は……何を？」

ゼウスはフツ、と笑い、口を開いた。

「悪魔を撲滅してきてくれ。」

汚染

「え、俺がですか？」

突然の申し出に少し戸惑うルシファー。

「そうだ。お前なら大丈夫だろう。無傷とはいえないが。」

ムムム。それは聞き捨てならん。

「いやあゝゝ、俺なら悪魔なんてチョチョいのバスターですよ!!」

「なんだそれ。まあいい。用件を掻い摘んで言うのだな・・・。」

てな訳で天国の少し田舎。

「ふむ。こちら辺に汚らわしい悪魔が潜んでいるのか。」

古ぼけた地図を手に、辺りを見回す。

どこを見ても木、木、木。

要するに森の中。

「さて、小腹が空いたので昼飯にしようっと。」

背負っていたリュックサックからマリアに頼んでもらった弁当を取り出す。

期待して弁当を開けると・・・

「なるほど。マリアさんは料理は得意じゃないみたいだ。」

弁当に入っていたのは、ホットケーキ（的な物）数枚。

どれも中心だけ焦げていて外側が生焼け。

「まあいいや。中心だけくり貫こう。」

結局、完成したのは薄っぺらいドーナツみたいなものになった。しかも、食べたら中身焼けてない。

とてもじゃないが食べる気にならないので、弁当を閉じる。

「しょーがない。搜索を続けよう。」
空腹を押さえ、森の中を彷徨い続けた。

「つ、疲れた・・・。」

出発した昨日の夜以来、何も食べてないのでもう限界。
その場に倒れこむルシファー。

ここで少し寝よう、と目を閉じた時だった。

仰向けに寝ていた顔の上を、一本の矢が通り過ぎた。

運よく当たらなかったものの、鼻を掠ってわずかに切り傷ができた。
「いでー！ー！！誰だあこのやろお！！」

飛び起きて周りを確認すると、木々の間から黒い羽を生やした生物
がぞろぞろ出てきた。

「あ、お前らかあ。ここは天国だぞ。俺に消されるか地獄に帰るか
選べ。」

余裕ぶっこいて発言していると、正面にいた奴が再度矢を放ってきた。

体を反ってギリギリかわすルシファー。

「あつぶねえなあ！！よいいぞ。相手になっちゃる。」

両手に感情の高ぶりを威力に表す白い拳銃を出現させ、左右にぶつ
放す。

左右一発ずつ、計二発で両サイドの悪魔のほとんどが消し飛んだ。

少しばかり焦りを見せる悪魔達。

「どおしたあ。死ぬ覚悟有りて宣戦布告したんだろ？少しは抗って
しろよ！」

前方に飛び、弓を持っていた悪魔の顔面に回し蹴りを入れて首を吹
っ飛ばす。

すると、今度は左右から大量の矢がルシファーめがけて飛んできた。当たる寸前で空高く舞い上がり回避する。

「ハッハッハ。今のは危なかったぜ。俺も本気で行くよ!!」
空中で銃を構え、引き金を引く。

「天使の号泣!!」

銃口から何万発もの銃弾が地上に放たれ、悪魔達を次々と撃ち抜いた。

カチン、と弾切れを伝える音と共に攻撃を終える。

地上に降りると、ほとんどの悪魔が穴だらけで死んでいた。

「うえ、グロ〜。」

肉片をまじまじと見つめながら吐き気を感じる。

刹那――――

飛び散る黒い鮮血。

背後からの生き残った悪魔の不意打ちをギリギリで阻止する。

が、近距離だったため発砲して体に大きな風穴を開けると黒い血がルシファーの左半身に付着した。

「このヤロオ・・・!!」

グシヨグシヨに濡れた銃や翼を見て、怒りに震える。

「フハハハハ・・・。俺の返り血を浴びたな・・・。」

不意に地面に寝そべる悪魔が口を開いた。

「白き翼汚れし時、内に秘める悪意と欲望がお前を堕とすだろう・・・。」
「。」

何言っただこいつ。

「どういう意味だ。」

「フッ・・・自分で考えろ。今に解る・・・。」

どうやら力尽きたようだ。

なんだよ、いいところで。

「あーあ。自慢の白髪と羽と銃が真っ黒だよ。しかも左半身だけ。」
この時、ルシファーは気づいていなかった。

周りの死体の血の色は、赤色だった事に……………

悪魔退治を終えて数日経ったある日。

「うぁ…………あったまイテェ…………。」

朝から頭痛がひどい。

しかもなぜか体の左側だけにどこか違和感を感じる。

「疼く…………。血が騒ぐ…………。体が燃えるように熱い…………。」

ボーっと歩いているといつの間にか天使達の憩いの場の一つ、宮殿近くの食堂に来ていた。

「あ、ルシファー。おはよ…………って、どうしたのその羽!？」

一人の天使がルシファーを見て大声で騒ぐ。

「羽って…………え？」

振り向いて自分の白い翼を見る。

が、目に映ったものはあの日と同じような、漆黒の翼だった。

「な…………なんで…………!？」

側に置いてあった水が入った樽を覗き込むと、翼だけでなく白髪も左側だけ黒く染まっていた。

「なんだあれ…………。」

周りの天使がざわつき始めた。

「ど、どうしよう!!」

ルシファーが振り返ったその先は、なぜか冷たい視線を向ける他の天使達がいた。

「お前、本当にルシファーか？」

目線の中央にいた天使が尋ねてくる。

「あ、当たり前だろ!!俺じゃなかったら誰だよ!!」

その次の返答は、あまりにも冷たいものだった。

「実は悪魔だろ。ルシファーの皮を被った。」

その言葉に、食堂の全員が体制を変えた。

いつでもルシファーに攻撃できるように、前かがみになる。

「ふざけんなよ!!何でそうなんだよ!!」

「ありえない話じゃない。ちよつと前に悪魔を撲滅しに出かけたという話を聞いた。」

「それがなんだよ？」

「だから、その時に実は殺されて皮を剥がれてた。って事だよ。」
なんてこった。

たかが黒い羽一枚で変な誤解を招いている。

「汚らわしい!!消えちまえ!!」

先ほどまで喋っていた天使が剣を片手に飛び掛ってきた。

「うわ!!」

反射的に銃を出して発砲する。

その一撃は、天使を消し飛ばしただけでなく天井に1mほどの巨大な穴を開けるほど強力だった。

「あ・・・。」

そこまで力を入れたつもりは無かったはずだ。

「こ、このやろおお!!」

次の瞬間、周りから大勢の天使が襲い掛かってきた。

「ハッ・・・はぁっ・・・！」

ルシファールと天使達の戦いが終わった頃、その場に居るのはルシファールのみだった。

周りは木材やなにやらの残骸が散らかっており、食堂は跡形もなくなっていた。

「なんだよ、この力・・・。」

五十名はいた天使が、開始数分ですべて消し飛んだ。

残っているとすればギリギリ砲撃をかわした腕や足のみだった。

「こんな力があつたら・・・。」

自分の力が怖くなった。

その時、

『コノチカラガアレバ、ナニガデキル？』

心の中で誰かが問いかけた。

————何って、何が・・・

『ナンデモデキルジャナイカ。オソラクオマエハサイキョウダ。カミニダッテナレル。』

————俺が、神に・・・！

神の住む宮殿正面玄関

「ん？お前は確か・・・ルシファールだったな。何の用だ？」

槍を持った門番の天使が横を向くルシファーに尋ねる。

「大した用じゃないさ。」

次の瞬間、両手に持つ白と黒の銃を撃ち、門番ごと入り口のバリケードをぶっ壊す。

「神を消しに来たんだよ。」

乱闘

「おらああああ!!」

勇敢に立ち向かってくる天使の兵を銃や格闘技で次々と殺していく。その力は強大で、すでに500人以上の兵士がやられていた。

(力が溢れ出る!!抑えきれない!!!)

気がつけば、周りは誰一人立っているものはいなかった。

「これくらいはウォーミングアップだ。神と戦う前のな。」

いつの間にか本気で神相手に勝てると思っていた。

どこからともなく自信と力が出てくる。

「とりあえず誘き出すために中庭を崩壊させるか。」

その頃、ゼウスとほか宮殿にいた神々は巨大な水晶で宮殿内の様子を見ていた。

「なんと言う事だ・・・あのルシファアが・・・。」

手を額に当て、汗を浮かばせるゼウス。

「天国ができてからこんな事初めてだな・・・。天使が天使を殺すなど。」

アフロディーテが冷静に発言する。

「どうする。そろそろ我々が出るか?」

「いや、まだだ。もう少し待とう。私たちの出る幕ではない。」

「そうか。では、戦力を一箇所に集中させよう。」

「だったら、先ほど中庭に行くと呼り言を言っていたな。それに従おう。」

おかしいな。

さっきからほかの天使が出てこない。

みんなびびったのか？

「なら楽でいーけど。」

黒と白の翼を羽ばたかせながら低空飛行で宮殿内を飛ぶルシファー。
実にシュール。

「とうっ、到着っ。」

中庭の中心に着陸すると、途端に左手の黒い銃を発砲した。
銃弾は、中庭で待ち伏せていた天使の一塊を消し飛ばした。

「待ち伏せとは良い考えじゃねえか。囲めば勝てると思ったか？」
両手の銃を構えながら余裕を見せる。

すると、周りからぞろぞろと武器を持った天使が出てきた。

（・・・。600ってどこか。）

どこから攻めようかな、と考えていると、一人の天使が話しかけた。

「おいルシファー。お前、何が目的だ？」

「あ？決まってるんだろ。偉そうにしてるゼウス辺りをぶっ殺して、俺が神になる。」

「何を馬鹿なことを・・・。どうしてそんな考えになったんだよ？」
人に意思を『そんな』扱いは。ひどい。

自らの黒い羽を見ながら答える。

「ついさっきさあ。どうやら俺の心は闇に堕ちたみたいだ。それでこんな羽になった。」

腹の中は元から黒いけどね。と言うのはやめておいた。

「力もすごくなったんだよ・・・ね！」

突然発砲し、天使を数人撃ち殺す。

「あはははは！！お前ら弱っ！！相手になんねえ！」

同じ天使を殺して、腹を抱えながら大爆笑するルシファー！

「お前・・・、それでも天使か!？」

天使なのかな、今の俺。

心が闇に堕ちた天使かぁ。

「そうであってそうでない。さしずめ今の俺は・・・、堕ちた天使。略して『堕天使』だ。」

「堕天使だとお・・・!？」

「さぁ、お話もここまでだ。最後に言い残す事ある奴今言っとけ。」
両手の銃を構え直し、なおも余裕を見せる。

「くっ・・・かかれええっ!!！」

先頭を切っていた天使の声で、戦闘が始まった。

「まとめて吹っ飛べ・・・。」

ルシファアは軽く浮き上がり、体を白と黒の羽の中に包んだ。

「防御だ!今のうちに畳み掛けろ!!！」

その言葉を聞き、羽の中で軽く笑う。

「守る必要なんてねえよ!！」

その瞬間、翼が白と黒の光を放った。

「何!？」

「喰らえ」

「堕天使の咆哮!!!」

凄まじい勢いで開かれた翼から強力な衝撃波が放たれ、周りにいた天使は一気に消し飛んだ。

「な、なんて威力だ・・・。」

たったの一撃でほかの天使はすっかり怯んでしまい、自分から向か

つていく事を躊躇し始めた。

「何をしている！！とつと八つ裂きにしてしまえ！！」
急かされてやっと数十名の天使がルシファーに突っ込む。

「200年早えんだよ！！」

が、虚しくも速攻で撃ち殺されてしまう。

「くそっ、雷撃用意！！」

指示を出すと、後方から杖を持った天使が何か唱え始めた。

「やべ。」

刹那、ルシファーの四方八方から垂直に雷が飛んできた。

「魔法はタブーだろ！！」

ギリギリで上空に飛び雷撃を回避する。

「フィニッシュだ！涙枯れるまで嘆いてろ！！」

空中で体制を変え、地上に銃を向ける。

「堕天使の号泣！！」

白と黒の銃から純白と漆黒の銃弾が地上に何万発も落とされる。

次々と撃ち殺される仲間を見て、先頭を切っていた天使は、死に物狂いに持っていた槍を投げた。

「無駄だよ。」

一直線に飛んでいた槍は、途中で銃弾とぶつかり粉々になってしま
う。

「くそお・・・、ここまでか・・・。」

そして、中庭での戦闘が終わった。

「墮天使か……。中々良いネーミングセンスだな……。」

一人でぶつぶつ独り言をつぶやくゼウスを、ほかの神々は白い目で見ていた。

それに気がつくのと、慌てて表情を変える。

「ウオッホン。失敬。」

「チッ。」

「誰だ今舌打ちした奴。」

「そんな事より、どうする。あの下級天使、あの戦力をものの数分で片付けたぞ。」

ルシファアの想像以上の实力を見て、流石に焦るアフロディテ。

「こうなったら、わしが行って海の藻屑にしてこよう……。」

海神ポセイドンが矛を担ぎながら立ち上がる。

「いや、待て。おr……。じゃなくて私に考えがある。」

ゼウスが手を上げてポセイドンを止める。

「どんな考えだ？」

アポロンが尋ねると、ゼウスは立ち上がりながら言った。

「私が行って、あいつを封じてくる。」

終焉

「わざわざあんたらの力を使うまでも無い。俺で十分だ。」

「何を……。お前は神々の王であり、オリュンポスの……。」
呆れた様子のアフロディーテを手で制し、指をポキポキと鳴らす。

「あいつは俺の……。いや、とにかく俺が行こう。」

右肩に雷を帯びた黄色い鳥を具現化させ、ルシファアの元に行った。

「出て来い！ 見てるんだろ、ゼウス！ アフロディーテ！ アポロン！
誰でもいいから勝負しろ！」

中庭、宮殿内でもっとも戦いやすい場所で相手を呼び寄せるルシファア。

いい加減のどが痛くなってきたその時、

「ギャーギャー喚くな。今来たからよ。」

空中に突如ゼウスが現れ、ふんわりと降りてきた。

「ケッ。相変わらずムカつく登場しやがる。調子乗ってられんのも
今日限りだぜ。」

何の躊躇いも無く二丁の銃をゼウスに向ける。

「ハハハッ。お洒落になったなルシファア。片側だけ黒染めして、
色気づく年頃か？」

冷静に、尚且つ挑発をするゼウス。

「馬鹿言えー。俺あもう人間で言う爺さんの年だ。脳年齢は二十
歳前後だけだな。」

少々頭に來たが、堪えて返答をする。

「そいつあすげーな。何で測った？」

「自称。つかさ、もう雑談はいいよ。はよ死ね。」

話すのも疲れてきたので、銃を同時に放つ。

しかし、銃弾はゼウスの右手に当たった瞬間、防弾ガラスに当たったように潰れて地面に落ちた。

「痒いな。蚊に刺されたかと思った。」

手の平を掻きながら愉快そうに笑うゼウス。

「よし、今度はこっちの番だ。」

ゼウスが右手を前に突き出すと、肩に乗っていた雷鳥が電光石火の如く飛び出した。

「チィッ！」

白と黒の羽で全面を覆い、防御体制に入る。

雷鳥がルシファーにぶつかり、数メートル後ろに吹っ飛んだ。

「意外だな。こいつの体当たりを耐えるなんて。」

両翼を開くと、数枚の羽が抜け落ちた。

「イテーイテー。羽にも神経通ってたんだな。」

「そらそうだ。今までどうやって動かしてると思ってたんだ？」

「しらねー。あといいい加減雑談に持ち込もうとすんのやめてくんないかな。」

今度は、銃を連射して顔面を狙う。

が、空から落ちてきた雷で全弾ゼウスの目の前で撃ち落される。

「諦めたらどうだ。お前は下級天使。俺は神。中身が違うんだよ。」

哀れみの目でルシファーを見る。

「黙れ。俺はそこら辺の雑魚じゃねえよ。堕天使なんだよ。独自の形、固有の能力！俺が神だと思うのは俺自身。新しい神の力を見せてやるよ！！！」

両手の銃を上下に構え、それぞれ発砲する。

「どこ狙ってんだお前、」

直感的に後ろに飛ぶゼウス。

次の瞬間、ゼウスがさっきまで立っていた所に上から黒い銃弾と地中から白い銃弾がぶつかり合った。

「あぶねえあぶねえ。今のはなんつー技だ？」

「・・・強いて言うなら、堕天使の挟撃。」

「何だ、捻りがねえ。ボツ。」

「なーんでお前に決められなきゃいけないんだよッ!!」

今度は地面を思い切り蹴り、空高く飛び上がる。

「ん。この技は・・・。なんて言ったかな。ルシファアの泣き顔だっけか？」

明らかにわざと間違えてルシファアをイラつかせる。

「堕天使の号泣!!」

ゼウスをシカトして両手の銃を乱射する。

「雷壁。」

ぼそりとゼウスが呟くと、頭上に雷が正方形に帯電された。

白黒の銃弾を受けても雷は穴一つ開かず、ゼウスは完璧にガードされていた。

「にやろう・・・。」

「おいルシファア。俺の鳥がどこ行ったか知ってるかー？」

ゼウスの言葉にハツとなり、後ろを向くとすでに雷鳥が突っ込んできていた。

「セコイなこの・・・!」

身を翻して回避を試みるが、まさかのホーミング性能で腹に直撃した。

「ぐあっ！」

地面に激突した拍子に、左手の黒い拳銃がどっかに飛んでった。

顔を上げると、目の前にゼウスが立っていた。

「まだやるか。そろそろ終わりにしたいんだが。」

「ふ、ざけんな！」

右手を突き出して銃を発砲しようとする、ゼウスがその腕を踏んだ。

「ルシファー。俺はちよつと理由があつてお前を殺したくない。だから、殺さずにお前を止める。」

「ケッ。説得でもすんのか。」

「説得ならすでに試したよ。でも意味無いから次の手に移る。」

ルシファーの右手に電撃を走らせ、麻痺したところで銃を蹴っ飛ばす。

「おらよつ、と。」

続いて、ルシファーの首を掴み遠くにぶん投げる。

「絶壁。」

ゼウスが唱えると、ルシファーが投げられた先に巨大な壁が出現した。

「何!？」

壁にめり込むほどの勢いで叩きつけられ、少し怯む。

「さらに、縛鎖。」

その隙を逃さず、ルシファーを壁に鎖で縛り付ける。

「この程度で止まると思ったか!？」

ルシファーが腕に力を入れると、鎖が軋む音がした。

「思っ
てないさ。これで仕上げだ。」

そう言う
とゼウスの右手に銀色の剣が現れ、ルシファーに向かって放たれた。

グサリ、と、腹を貫通して後ろの壁にまで深く剣が突き刺さった。

「ぐはっ……。」

吐血した血が地面に広がる。

「冥土の土産に教えてやるよ。ルシファー、お前はな……。」

一旦俯き、言葉を止めるゼウス。

なんだよ、とルシファーが聞こうにも声が出ない。

そして、またゼウスが顔を上げ、こう言った。

「お前は、俺とマリアの子。つまり俺たちは親子だよ。」

その言葉に、目を大きく開き、驚愕した。

「マリアの奴、いつもお前の側に居たろ。変に思わなかったか? 女神が下級天使とほぼ一緒にいるなんて。」

そう言えば、そうかも。

何万もいる天使の中で、なんで俺にばかり近づいてきてたんだ。

そういう事だったのか……。

「だがな、お前がこうなった以上仕方が無い。この下で眠ってな。」

ゼウスが言い終わると、壁が動き出し、地面に沈み始めた。
ルシファーに背を向け、浮上していくゼウス。

首の辺りまで地面に潜り、あと少しで全身が埋まる、寸前。

「さらばだ……我が息子よ。」

涙を押し殺した声で、一柱の神が呟いた。

「じゃあね……父さん……。」

そして、一体の堕天使は神々の宮殿の地下へと封印された。

終焉（後書き）

ラスト、『西遊記』みたいにしました。というかそのもの。
（※釈迦如来が吾空を封印するのとか、実は子とか。）

これにてこの小説はおしまいです。
お読みになってくださった方々、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6990k/>

墮落～墮天使もキレル～

2010年10月8日12時53分発行